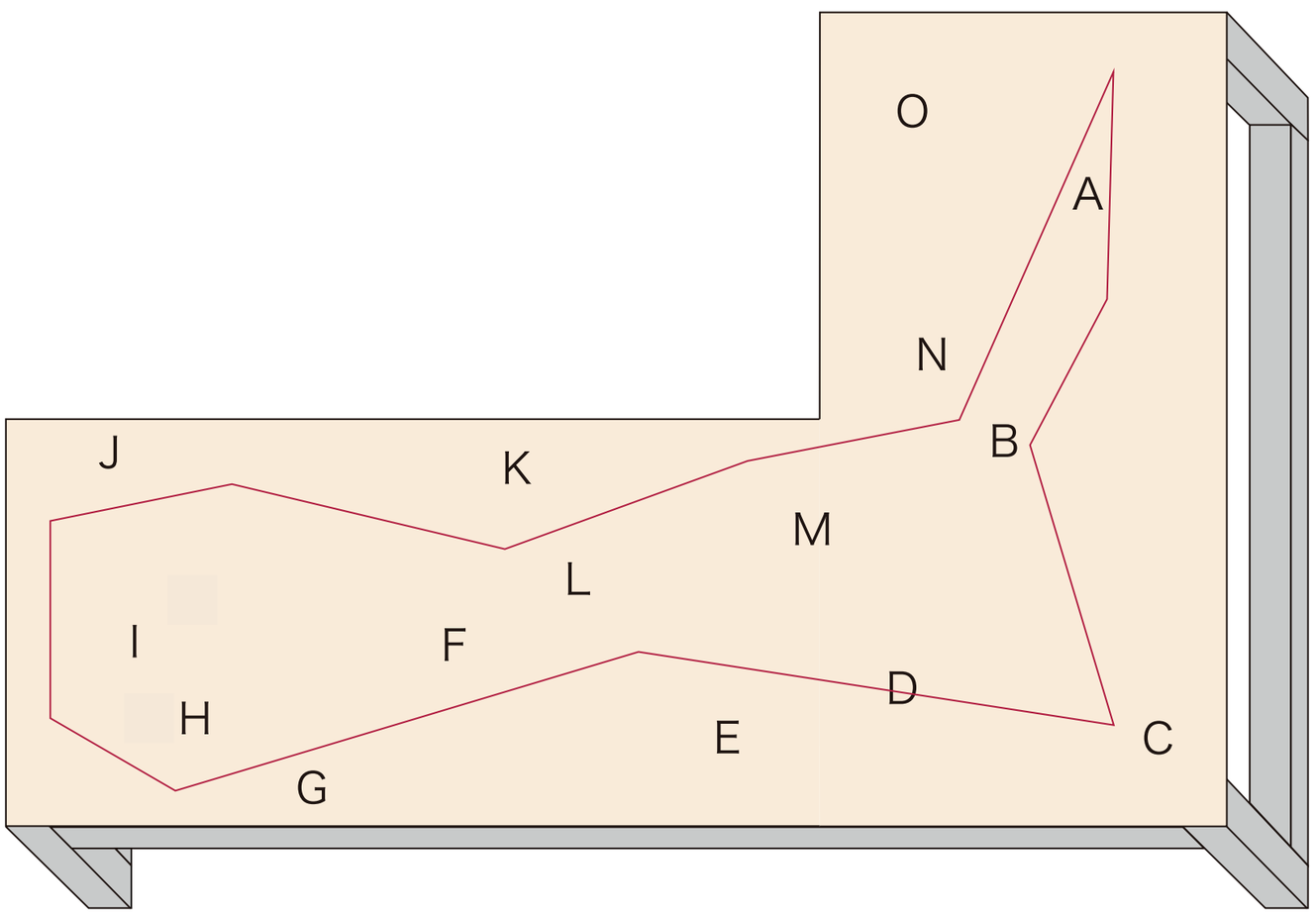
plaything / ビューポインつ

「plaything」という語は、遊び道具やおもちゃを意味するほか、他者に弄ばれる慰みものというニュアンスを持つ。「ビューポイント」は、視点や見解を意味する。本作品は、物に与えられた意味を、複数人で弄ぶかのように捉え直す試みである。

A〜Oの１５のテキストをもとに制作したオブジェクトを、L字型のテーブル上に配置した。作者を含む４人の話者は、移動する小型スピーカーを追いながらオブジェクトを観察し、その位置で感じたことや考えたことを文章にして朗読した。展示会場では、その朗読音声が小型スピーカーから再生される。小型スピーカーがテーブルを一周するごとに、再生される朗読音声は別の話者のものへと切り替わる。

テキストはオブジェクトへ、そのオブジェクトは新たなテキストへと捉え直される。ビューポイントとなる小型スピーカーを動かすテーブル状の装置は、そのための場として機能する。



A　もうすでに雨は止んでいる。
B　午後 1 時は過ぎているはず。
C　あ、雨雲。
D　花小金井駅の高架下を通り抜ける。
E　その先で「コンタクト落ちた落としちゃったんですよ！」と叫ぶ人に出会う。
F　「手伝いますよ」と話しかけると「ありがとう一神様ですね神様さん」と涙声。
G　神様と名付けられた？
H　しばらく探したがコンタクトレンズは見つからなかった。
I　そして今ついさっきまで足元に向けていた視線を前方に移すと二階建てのアパートがあったから、各戸を順に見たのち上空へ目をやると青空だったので、すてきな水色だなと思っていた。
J　すてきな水色だなと思っていると、子犬を散歩させる人が視界に入る。
K　「可愛いですね」と話しかけると「ひなたちゃんよ、名前ね。ひなたって名前。もう 15 歳よ」と言われて、年齢にびっくり。
L　老犬のひなたに近づくと小汚くて、また反応も薄いから、そろそろ死ぬんだろうな。
M　ひなたの黒目に映る景色はこの顔が邪魔をしたから見えなかった。
N　「このひなたは二匹目のひなたなの」。詳しく聞くと[ひなた]とは、昔飼っていた犬の名前でもあるらしい。
O　[ひなた] という名のこの老犬が、何者なのか分からなくなった。

話者 1（女性 22 歳）

２Ｌのペットボトルが猫よけとされているが、それは昔出回った嘘だと聞いた。通学路の地蔵の周りにたくさん置いてあって、それを見るとギョッとするので、全く効果がないとは言えないと思う。大きなコンタクトレンズが落ちている。目の悪い友人がしばらく家にいた後、歩くと足の裏に何度か乾いたコンタクトレンズが張り付いた。実家の堀の裏に、ホースのついた蛇口があって、向かいの団地の友達が足をかけて壊してしまった。それを直すのに、近所からあちこち人がやってきて、ようやく直った時、お詫びだと言って、蛇口を壊した家の親が、ボウルに食材を混ぜて持ってきて、「めだか」という料理を振る舞った。魚とは関係なく、刻まれたうどんが入ったチヂミのようなものだった。

話者 2（男性 23 歳）

この縦に長いテーブルの上に陶器人形が置かれている。その左下には計量器があり、皿にはペットボトルが乗っていて、針は１時の方向を指している。今は前方にある花模様が施された取っ手よりも右側に鉄たわしはあり、その位置はテーブルの角にあたる。この横に長いテーブルの上に置かれた陶器人形の右下には計量器がある。正面には収納ＢＯＸが二つ重ねられており、ゴムチューブが時計回りに絡みついている。左を向くと男女の陶器人形が見える。二人は背中合わせに立っている。女は花束を、男は果実の入ったバスケットを抱えている。足元にいる水鳥は、女の顔を見つめている。女の視線は半球状の金属に向けられており、そこには陶器人形も映り込んでいる。ひなたと書かれている付箋が貼られている紙袋が木目のあるテーブルの上に置かれている。

話者３（女性12歳）

なんか白い丸が、なんかに、引っ張られてる感じで、動いてて、この黒いもしゃもしゃは、なんかジブリで一回出てきたと思うまっくろくろすけみたいな。なんか、このおっきいコンタクトレンズアリエッティの世界にありそう。それで、名札よく学校でいっつもつけてるけど、つけてなくて、怒られた。ピンクのチューブや。理科室にありそう。この電気は、うちの机にも、なんか置いてあるから、よく使う。このもしゃもしゃは掃除の時間に、たまにあの、保健室に、使う。で、またピンクのはかりでてきて、このAmazonの袋みたいなのもあって

話者４（男性 27 歳）

Ｌ字のテーブルのうえに乱雑に置かれたと感じさせるようデザインされたモノたちは、テーブルを平面としたときにモノの中心を通る水平垂直の線がすべて他者の中心を通らないように奇妙な距離感を保ってそこにある。モーターの音と共に進んだり曲がったりするスピーカーは、言葉を発すれば徘徊する人のように振る舞う事もでき、エンジンの音が鳴ればクルマの様にも振る舞えるだろう。さすれば鑑賞するうえで一つの指標になりうる。テキストと装置によりテーブルは舞台にかわり、不親切ながらも設計者の思惑通りモノの意図を探らざるを得ない、しかしながらそこに意味がある確証はなく徒労を招くかもしれない。つまりはひなたという名のエンティティは名札をつけるような幼さかもしれないし首輪をつけるような嗜好かもしれない。もしくはその小包のなかにいるかもしれない。